
晴天雨傘

Wanda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴天雨傘

【Nコード】

N8154V

【作者名】

Wanda

【あらすじ】

きつねの嫁入りの話。

別サイトにも載せています。

真っ黒い空から落ち始めたしずくは、突発的な大雨に繋がりそうな気配を見せている。慌てて走りかけ、今履いている靴を思い出した麻帆ははつと足をゆるめた。

この、先週買ったばかりのミュールは雨に当てたくない。その気持が駅まで走るか一度バイト先へ戻るかを迷わせ、そうするうちに大粒の雨が次々に地面へ点を付け始めた。このままでは、靴どころか全身がずぶ濡れになってしまう。

あわてて周りを見回した麻帆の目に立派な門が入り、とっさにその下へと駆け込む。汚れて読みにくくなっているが、看板が付いているから何か人に向けて開いた場所のはずだ。ここなら、もし住人に見つかったても注意はされない、と思われた。

ひとまずはそう考えておき、濡れた髪を整えながら空を見上げる。端の方に覗く青空から通り雨だと判断して、息が整うと次は携帯を取り出しそれを開く。そして、止むまでの間の暇つぶしと今の不満をぶつけるべく、適当な相手へのメールを打ち始めた。

本当に、ここ数年の天気はどうなっているのだろう。四季があることが日本の美点ではなかったのか……。そんな考えを混ぜた短文を送り、ぱたんと携帯を閉じた時、ふいにけぶっていた景色が明るくなった。

顔を上げて太陽の光が射していることに気づき、通り雨の終わりを期待して屋根の向こうの空を見上げる。しかし今の陽光はどこか遠い雲が退いただけらしく、真上はいまだに真っ黒いままだった。

なんだとため息をついて再び携帯を開きかけ、カラカラと戸を引く音を聞いて後ろを振り返る。

「こんにちは」

目が合って数秒ののち、先にあいさつをして来たのは向こうの青年で、麻帆も慌てて「こ、こんにちは」とややどもりながら言う。

カッコイイという言葉が頭をぐるぐるしながらも、紺の線で柄の入った薄水色のシャツとジーンズという格好を冷静に値踏みしてもいた。

ブランド物じゃなさそうだなと思い、自分と同じほどの年齢から大学生なのだろうと見当をつけておく。同じように麻帆を頭から足の先までさつと見た後、住人らしき彼は傘を玄関の内から引き出し、門の下まで歩み寄って来た。

勝手に雨宿りするなと言われるだろうか。構えた麻帆に、青年は穏やかに話しかけてくる。

「すごい雨ですね」

「そうですね」

ざあざあとする雨の中でもその声はよく通り、やわらかい口調から怒られるわけじゃないようだと内心胸をなで下ろす。

「この道はよく通られるんですか？」

「え？ いいえ」

不思議なことを訊ねられ、首を振るとやっぱりというような顔をした。

「この辺りに昔から住んでる人は、雨の降りそうな日はここは通らないんですよ」

確かに、一本南を広い、コンビニなども並んでいる通りがあるからか、ここは完全な裏道になっている。麻帆もバイトの帰りにゴミ出しを命じられなければ、この狭い通りには踏み入らなかつただろう。

しかしなぜ雨の日に限ってなのだろうか。疑問が顔に出ていたのか、訊ねるより先に詳しいことを説明してくれる。

「この通りには古いお稲荷さんがあるんです。こんなおかしな、天気雨の日には……、ああ、ほら」

言って示したのは今麻帆が歩いてきた方で、同じように顔を向けてぎよつと目を見開いた。

「え、え？」

大粒の雨の中、何の祭なのかお神輿が近づいて来ている。担いでいるのは羽織袴の十代初めの少年たちで、それなのにまったく重たげでなく神妙な顔をしていた。

ぼかんと口も開くうちに、しずしずと進む神輿は目の前を通りかかり、かたわらに開かれた小さな窓から中の様子がちらと見えた。泣きじゃくる、一人の女の子。中学生くらいに見えて……白い着物を着ていた。

ずんと胸に衝撃を受け、後ろに数歩下がったところで門の柱にぶつかり止まる。現実味のない光景が通り過ぎてしばらくのち、雲がかかったのか射していた陽光は消え、再び辺りは雨に真っ黒くけぶり出した。

激しい水音の中、よく通る声が言う。

「花嫁に選ばれた女性は人の記憶からは消えてしまうから、あの子がどこの誰なのか、俺たちには分からないんです。でも、誰も彼も嫌そうにしているから……」

皆、見てしまわないように、雨の日はこの道は避けるのだそうだ。半開きの口をようやく閉じ、頭を何度も振って今見た何かを追い払おうとする。男の子たちの着物や、お神輿はまったく濡れている様子がなかった。それで人を、花嫁を運ぶというのは一体何なの？ 今の光景が自分の常識から外れた世界だと分かり始め、麻帆の気分は段々と悪くなって行く。

「大丈夫ですか？」

「……はい、なんとか」

呼びかけで我に返り、うめくように答えてから一度大きく息を吐き出す。それでようやく気分が晴れて、顔を上げると青年が微笑んで傘を差し出して来た。

「もうすぐ上がると思いますが、よかったですね、貸出用なんで使って下さい。今度通る時に、この門のところに置いてくれたらしいんで」

唐突ながらありがたい申し出に手を伸ばしかけ、思い浮かんだ考

えに動きを止める。何かを借りた以上は返しに来る必要があり、それはまたこの通りを歩くことを示していた。

怪奇現象の起こる道を気楽に歩けるほど、麻帆は度胸が座っていない。まだ雨の音は強く、どうしようかを迷っている、「ちよつと待って」と言い残して青年は一度家の中へ戻って行った。

まばたきをしているうちに戻って来たその手には、片方に先程の傘、もう一方には安っぽいビニール傘が下げられていた。自分より大分上にあるその目を見上げると、笑顔を添えてビニール傘の方を差し出される。

「これなら、捨ててもいい物なんで」

返さなくていいと言っているらしい。しかし、ビニール傘とはいえ借りた物は返さなければいけないと、麻帆の常識が言っている。しばらく迷い、心を決めた。

「あの、そっちの傘借りてもいいですか？ 雨まだ強いし、ビニール傘だと小さいから」

言い訳をしながら白い方の傘を示すとおかしそうに笑われ、それでもはいと手渡してくれる。

「ありがとうございます」

さっきのようなモノが見えるというのは、きっと雨の降る時だけだ。それならカラッと晴れた日に来ればいいだろう。そんなことを思いながら留めを外し、しばらく待ってからジャンプ傘じゃないのだと気が付く。自力でパンと広げ、その内側を見て数度目をまばたかせた。

「青空」

前に雑誌で見かけ、気になりながらも値段のために買えなかったしゃれた傘だ。シンプルな白い傘の内に広がった青空から持ち主へ視線を移すと、いたずらが成功したという顔で麻帆を見ていた。

「いいでしょう。いつでも天気雨で」

「素敵ですね」

青空を黒い空の方へ伸ばし、はっと気づいて改めて頭を下げる。

「本当にありがとうございます。それでは、お借りします」

「はい、どうぞ。返しに来るのは、いつでもいいので」

そうは言っても、傘は手元にないといざという時に困るものだろう。乾き次第お菓子でも付けて返そうと、麻帆は立派な門を改めて見上げる。

「あ、これ」

「うん？」

「じんぐうじ？ って書いてあるんですね」

「ああ、そうですね」

読みにくい墨の文字を読み上げ、ゲームの探偵か何かの名前にあったから、この彼の名字なのだろうと思う。

「あ、念の為。わたし、白川麻帆です」

名乗ると、青年は「白川さん。覚えておきます」と微笑んでくれる。その表情にどきつとしながらも神宮寺さんと頭に刻み付け、もう一度礼をして門の前を離れた。

駅の方へ歩いて行く途中、怖いと感じながらも目は先程言っていたお稲荷さんとやらを探していた。しかし道沿いにはないのか、鳥居もほこらも見つけられないうちに見知った大通りに出てしまい、ひとまずはほつと息を吐き出した。

天気雨とお稲荷さんと花嫁。そういえば雨が降っているのに太陽が出ていることを狐の嫁入りと言うっけ……と今出てきた通りを振り返り、厚い雨にけぶる細い通りをしばらく見つめていた。

もやもやとした気持ちは消えないが、少ない情報で、おかしな出来事の真相を確かめようとしても仕方がない。気持ちを切り替えるために青空の広がった傘を見上げ、それにしてもカツコイイ人だったなあとおの青年のことを思い浮かべた。眼福眼福と心で唱え、くるり傘の柄を回す。

駅が近づき人通りの増えた道を急ぎながら、お礼のお菓子はどんな物がいいだろうと考える。まだ雨も上がっていないのに、早くまた会いたいと思いはじめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8154v/>

晴天雨傘

2011年8月15日03時12分発行